

## P4-155 当科における境界悪性卵巣腫瘍、卵巣癌に対する妊孕能温存手術についての検討

琉球大

屋宜千晶, 大山拓真, 伊志嶺梢, 名城嗣久, 平川 誠, 稲嶺盛彦, 長井 裕, 青木陽一

【目的】境界悪性卵巣腫瘍, 及び卵巣癌に対し, 当科で妊孕能温存手術を行った例においてその予後, 術後の妊娠・分娩に関して検討する。【方法】当科で平成5年1月から平成15年12月までの期間に, 境界悪性卵巣腫瘍, もしくは卵巣癌に対して妊孕能温存手術を施行した33例において, その予後と術後の妊娠の有無, 妊娠の経過について診療録を後方視的に検討した。【成績】境界悪性腫瘍, もしくは卵巣癌に対して妊孕能温存手術を施行されたのは33例 (median age: 30歳) であった。組織学的な内訳は, 表層上皮性・間質性腫瘍11例 (Ia期3例, Ic期7例, IIc期1例), 性索間質性腫瘍1例 (Ic期), 胚細胞腫瘍4例 (Ic期3例, IIIc期1例), 境界悪性卵巣腫瘍17例 (Ia期10例, Ic期6例, IIc期1例) であった。施行された術式は, 片側付属器切除術29例, 片側付属器切除術+対側腫瘍核出術1例, 片側腫瘍核出術2例, 両側腫瘍核出術1例であった。術後追加治療として, 8例に化学療法が施行された。平均観察期間は63か月 (range: 3~137か月) で, overall survivalは100%, 33例中2例に再発を認め追加治療が施行された。11例において14の妊娠が成立し, そのうち不妊治療後の妊娠は2例であった。1例は現在妊娠継続中, その他の例については全例生児を獲得している。【結論】当科における境界悪性卵巣腫瘍, もしくは卵巣癌に対する妊孕能温存手術の成績は良好であった。妊孕能温存手術の条件を満たす場合には症例ごとに適切な術式を検討すべきであると思われる。

## P4-156 過去20年間の当科における若年卵巣癌患者に対する妊孕能温存手術後の予後

防衛医大

加藤雅史, 吉川智之, 佐々木直樹, 高野政志, 古谷健一

【目的】若年卵巣癌患者で妊孕能温存手術を施行した症例における長期予後について検討した。(方法) 対象は1984年から2004年の20年間に当科で妊孕能温存手術が行われた境界悪性腫瘍を含む卵巣癌患者60症例で, 年齢は6-39歳 (平均26.7歳) であった。組織型は上皮性腫瘍30例, 胚細胞腫瘍29例, 性索間質性腫瘍1例で臨床進行期は1a期31例, 1c期24例, 2c期1例, 3b期2例, 3c期2例であった。(結果) 死亡した症例は8/60 (13%) で, その内訳は上皮性腫瘍では1a期1例 (粘液性腺癌G2), 1c期5例, 2c期1例であった (組織型別では粘液性嚢胞腺癌5例, 類内膜腺癌1例, 漿液性嚢胞腺癌1例)。上皮性腫瘍の死亡例での生存期間は19-114ヶ月 (平均62.2ヶ月) であった。胚細胞性腫瘍では卵黄嚢腫瘍1a期1例であった (生存期間は65ヶ月)。その他の悪性または境界悪性腫瘍については全症例が無病生存しており, 生命予後は概ね良好であった。殆どの症例で治療終了後数ヶ月で月経発来をみた。年齢の高い症例で月経発来が遅延する傾向にあった。抗癌剤治療後妊娠に至った症例は15例 (30.3%) で, 生児を得た症例は13例 (27.3%) であった。(結論) 挙児希望を有する若年女性の卵巣癌治療では, 組織型, 進行期の考慮は必要であるが, 全体として妊孕能温存手術を行っても十分な長期予後が期待されること, また通常の化学療法であれば卵巣機能の回復が見込まれることが示唆された。

## P4-157 キャリアー細胞全身投与による卵巣癌特異的細胞性免疫性遺伝子治療

愛媛大

濱田雄行

【目的】ウイルス単独による遺伝子治療では, 抗体産生により感染が完全に抑制され, 抗腫瘍効果を示さない。我々は, 卵巣癌特異的 IAL3B promoter を導入した細胞融解型アデノウイルス AdE3-IAL3B を感染した A549 キャリアー細胞を用いると, 断片化したキャリアー細胞の標的癌細胞による貪食作用により非受容体依存性に感染が成立し, 抗体による感染抑制が解除され1から3回の腫瘍内投与で完全腫瘍退縮となることを明らかにした。しかしながら, 腹腔内播種性転移をきたす卵巣癌に対して頻回腫瘍内投与を行うことは手技的に困難な面があり, 経静脈的全身治療の開発が必要となる。今回, AdE3-IAL3B 感染 A549 キャリアー細胞の経静脈的全身投与の可能性について検討したので報告する。【方法】キャリアー細胞には放射線照射した A549 細胞, syngeneic mouse model には (C57BL/6 x C3/He) F1 mouse, 標的癌細胞には同種由来のマウス卵巣癌細胞株 OVHM を用いた。AdE3-IAL3B 200MOI, 24時間感染後の 549 キャリアー細胞を尾静脈より  $5 \times 10^6$  cell/mouse 投与した。【成績】A549 キャリアー細胞は, cytopathic effect により球状となり, ほほ幼若白血球と同様な細胞径となった。GFP を導入した GFP-A549 キャリアー細胞および Renilla Luciferase を導入した Renilla-A549 キャリアー細胞は, それぞれ in vitro 蛍光顕微鏡および in vivo imaging において腫瘍集積性が認められた。キャリアー細胞尾静脈1回投与において, アデノウイルスの事前免疫後5匹中3匹が完全腫瘍退縮となり再発も認められなかった。【結論】キャリアー細胞の経静脈的全身投与による細胞性免疫性遺伝子治療は, 卵巣癌の治療に有用であることが示唆された。